北方山草(38): 88-90. March 2021

南アフリカ原産球根オキザリスの楽しみ

札幌市　齋藤　　央

オキザリスつまりカタバミ科カタバミ属 *Oxalis* と聞くと、少し植物を御存じの方は大抵「ああ、雑草ね」と返します。事実、カタバミ *O. corniculata* は種子と地下茎の両方で殖える強雑草ですし、南アフリカ原産のオオキバナカタバミ *O. pes-caprae* は家畜が大量摂取すると中毒を起こすとして自生地近傍の牧畜農家から警戒されるだけでなく、西日本を含む世界中の暖温帯～亜熱帯に帰化しています。

オキザリス全約700種のうち南アフリカでは約270種が記録されており、中南米と並んで分布の中心域とされています。ヒシのようにロゼットを水面に浮かせて育つ種(図1)さえあると言えば、その適応放散ぶりがお分かりいただけるかと思います。

図1　水生の球根オキザリスの一種 *O. natans*
引用元URL　https://twitter.com/alexlansdowne/status/1306116147754958849/photo/2　2020.11.30 確認

南アフリカのオキザリスは大半がフィンボス(Fynbos)と呼ばれる西ケープ州南部の灌木群落に自生しています。気候は典型的な地中海性気候で、ほとんどの植物は灼熱の夏季には休眠し、降雨がある秋から春にかけて成長・開花・結実します。このようなライフサイクルの所謂“冬型”植物は北海道では庭植えに耐えない反面、屋外が雪で閉ざされ庭に花が無い季節に室内で育てるには持って来いです。あまつさえ、球根性オキザリスは基本的に4-5月には休眠に入るため、フィールドワークに勤しみたい季節には水やりが一切不要という有り難さがあります。成長期も、背丈がほとんどの種で30cm以下に収まり、鉢の直径を超えて繁ることがあまりないため横幅もあまり取らず、手狭な窓辺で複数種を気軽に育てられます。花の直径は1-2cmのものが多く、基本的には日中のみ開きますが、種によっては温度に反応して開閉したり咲き進むと開いたままになったりします。

南アフリカの球根性オキザリスには、①茎が長く立ち上がる種: 例 *O. hirta*, *O. glabra*(図2) ②短い茎の先にロゼットを形成する種: 例 *O. phloxidiflora*(図3)、*O. convexula*、③地際

図2　*O. glabra* の濃紅色系統。“桃の輝き”という品種名で稀に市販を見る

図 3　小葉が針金のように細い *O. phloxidiflora*

図 4　多肉質の葉がロゼットを形成する *O. inaequalis*。花の直径は 500 円玉大

でロゼットを形成する種例 *O. inaequalis* (図 4)、の 3 種類に大別されます。①に属する種を中心に日向を好む種が殆どですが、一部の種は耐陰性があります。

③に属する幾つかの種は、休眠期が近づくとロゼットの基部に粟粒大のムカゴを多数付け (図 5)、爆発的に殖えます。それ以外の種でも、球根から地上に伸びる茎の途中に子球を付けたり、地下茎を伸ばして新球を多数作ったり、葉腋から細い枝が地下に潜って子球を形成したりします。オキザリスを栽培した後の用土は、加熱して残った球根やムカゴを死滅させる処理をしなければ、再利用の暁に植えた覚えの無いオキザリスを見る羽目になります。

但し、繁殖のスピードは種によってまちまちで、中には繁殖しにくい種もあります。血のように赤い花を咲かせる *O. helicoides* や近縁の *O.* sp. “Namaqualand Red”(図 6) は殆ど分球せず子球も作りません。*O.* sp. “Namibia” の名前で細々と出回っている未記載種 (図 7) も分球が稀で、上記 2 種ともど

図 6　*O.* sp. “Namaqualand Red”。花は赤色で美しいが短命 (1 ～ 2 日)

図 5　*O. inaequalis* のロゼットの基部に形成されたムカゴ

図 7　葉 花ともに観賞価値が高い *O.* sp. “Namibia”。繁殖力の弱さが普及を妨げている

も愛好家間の取引ですら値崩れの気配が見えません。

O. inaequalis や *O. dregei* (図 8) はユリに似たスパイシーな香りを放ち、*O. phloxidiflora* はフジそっくりの甘い香り、という具合に、幾つかの種は花に芳香があります。*O.* sp. “Namibia” のように葉に美しい模様が入るもの、*O. dregei* や *O.monophylla*(図 9) のようにオキザリスらしからぬ単葉を出すものなど、花が無くても楽しめる種もあります。

栽培用土を選ばないのも、球根性オキザリスの有り難いところです。神戸に住んでいた頃にはもっぱら細粒鹿沼土単用で、どの種もうまく育っていました。湿地性の *O. dregei* はミズゴケ単用やピートモス単用で植えて腰水しておくと休眠せずに年中葉を出します。

図 8　単葉種 *O. dregei*。軍配に似た葉を次々に出し、強い芳香を放つ白い花を咲かせる

図 9　乾燥を好む単葉種 *O.monophylla*。タヌキの尻尾のような葉を直立させる

大半の種は休眠中の球根の中で既に花芽を形成しているので、開花中以降の球根形成の頃に栄養を如何に行き届かせるかが栽培の第一のポイントです。

第二のポイントは、休眠中の球根を腐らせないことです。私から球根性オキザリスの分譲を受けた方の中で失敗した方に話を聞くと、地上部が枯れた後も鉢に水をやり続けて球根を腐らせてしまっていました。休眠中の球根は乾燥させるほど生存率が高くなるため、葉が黄ばんできたら完全に断水し、葉が枯れ始めて土が乾いたら球根を掘り上げて陰干しし、完全に乾燥したらチャック付きポリ袋に入れて放置します。

植え付けは発芽してからの方が確実です。地中深くに球根を作りたがるので、極小型種でも 2cm 以上、できれば 4cm 程度の深さに球根を埋めてやります。あとは最低気温 5℃以上の場所で極力日光に当て、週 2、3 回灌水してやります。